

デジタルアーカイブの利活用のハイブリッド化 (1)

～提示の状況に応じたメディアの利用へ～

加治工 尚子、齋藤 陽子、櫛 彩見、加藤 真由美 (岐阜女子大学)

1. ハイブリッド利用

デジタルアーカイブの利活用は、2010年頃までは提示が主であった。その提示方法として、後藤忠彦「デジタルアーカイブの新しい展開」岐阜女子大学(2012年4月)では、「電子提示(デジタル提示)」「印刷メディア」「体験シミュレーション、レプリカ等」「通信メディア」が示され、その中から異なる種類のを組み合わせて Hybrid Media として使われているとしている。

デジタルアーカイブは、その機能として、入力メディアとは異なるメディアでの出力を可能にする。利用者の目的に適したメディアを選択し、その利用条件に応じたメディアを用いることができる。すなわち、デジタルアーカイブの Hybrid Media とは、当時、

「多様な資料をデジタル入力」し

「デジタルアーカイブとして保管」し、その中から

「最も適するメディア資料を選定し(組み合わせ)利用」する

機能を表す用語として用いられていた。

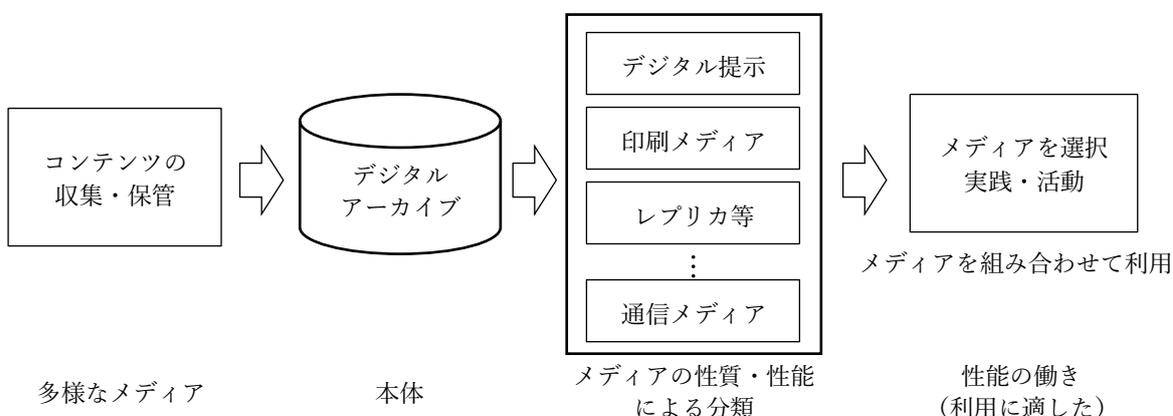


図 1 デジタルアーカイブと Hybrid Media

2012年当時、後藤からは、「ハイブリッド」という名称を教育で利用することは少し待つようにと指示があった。それは、次のステップで、デジタル保管した過去の資料を用いて、(当時)全国最下位であった沖縄県の学力向上の課題解決や知的創造サイクルの実践において、関係小学校や教員等に不要な批判で迷惑をかけたくないとの思いからであった。

(その理由として、後藤は、かつて1970年代にアナライザーやコンピュータの教育利用(CMI)の実践研究において他の学校の教員やマスコミ等の一部から教育工場などの批判を受けたことがあるため、沖縄の研究実践校や教員に迷惑をかけたくないとの配慮からHybridの用語を使わなかった。しかし、現在は新聞等のメディアもハイブリッド講習などの表現を使いだし、その配慮の必要がなくなっている。)

2. 遠隔教育、GIGAスクール構想での教育リソースのハイブリッド活用

情報化やグローバル化が進み、「変化の激しい社会」、少子高齢化による「人口減少」「人生100年時代」「終身雇用の崩壊」が始まりだした。学校教育の役割は、このような社会の変化に対して、当然変わる段階になった。その対応の一つとして「GIGAスクール構想」は考えられるべきである。全児童に情報端末を持たせ、情報活用能力を育成し、学習の道具として各教科で活用させる。さらに、リソースから問題を見出し、それを友達と協働して解決する学びのスキルを習得し、新しい学びを可能にする。このような学びのスキルを身に付け、社会で活用できる教育の資源としての「教育リソース」の構成を検討する必要がある。

また、遠隔教育では、学習情報資源(教育リソース)が整備されたe-learningの開発も進みだし、対面授業と合わせハイブリッドなど学習環境の提供が始まった。

これらに対応できるメタデータは、初期とは大きく変遷してきていると考えられる。たとえば、メタデータの構成は、それぞれの保管・利活用の状況に対応し、メタデータの構成が変わりだした。

遠隔教育やGIGAスクール構想では、教育リソースのハイブリッド活用に対応できる構成が求められる。とくに、教育リソースでは、コンテンツの管理情報の他に5W1Hに対応する項目が必要とされる。たとえば、保管、流通、紹介を主とするハブ機関や統合ポータルでは4Wが必須とされるが、デジタルコンテンツの活用では、権利処理が行われていれば、内容の加工処理も可能になる。とくに、教育リソースでは、ハイブリッド的な活用の視点からも加工処理が求められるため、その活用結果も還元情報として記録されるような循環型の利活用が求められる。

今後、ハイブリッド講習や授業(対面とe-learning等)といった教育リソースの活用が本格的に始まると、メタデータの記録項目についての再検討が必要になる。



図2 メタデータ構成の変遷

今後、デジタルアーカイブの利活用が企業、教育、観光等で多様な使い方がされだすと、各分野でハイブリッド活用が進みだすと考えられる。